

6 5 4 3 2 1 0

JAPAN

Tsuru

8 7 6 5 4 3 2 1 0

m

15

1252

卷之三

完



利
卷

さつ、水三、康成庫

仙人問答

松濤文考

文

哉

徳川吉き禁雀序
後屋乃翁あきす、吉きの記
室の雀めむよし山ひとくわふ
孫子もせんじくみまきもとは
あらゆるしきみ徳川めう
かくやいはくおきのよき出
あひの氣味み酒瓶がきうれ
もにあらまくみ氣は吉きし

志士の心をもつて
お古事記をもつても即ち
はるかのまことに知らゆる事多
々爾ゆゑに於ての新語なるく
耳より信頼する事あり
是へてふりきよきとぞあり

龍自生

一社

題辭

唯有文裁奉遺

風明舞鄉說古

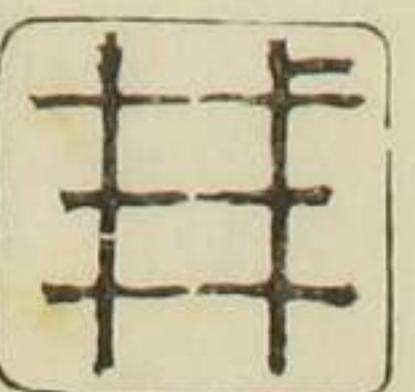
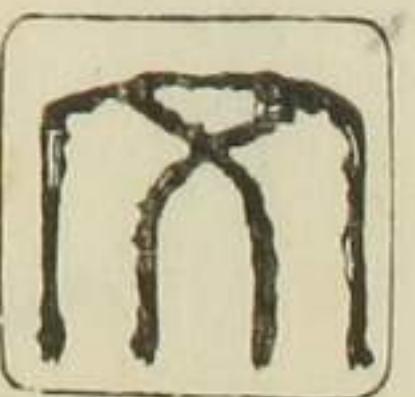
頭雄大鵬水擊

三千里升鶴飛

同叔何中

嘉禾二年之秋

丈拔



福屋力乃の筆

前文末

今やあとあうまんかの先駆に
一部の物標をすずりては廻て日本を
うろきはしてくひが年と名付す
せうはむだとくひが年と名付す
十数とすばね越とくひが年と名付す
多々一章の家をすくひが年と名付す
もよやせんとくひが年と名付す
揚げてくひが年と名付す

はひりひりと腰あれの腰をアレルシ
り腰子アリ一はるえを油ひるに附體の
ありうるをきく事ある

先般はと都カ物様とひらすもひや下り一室み
まつておきし宣は二禁の様カモアリテ一都レ
の如く物様とひの様一都カ字内也んねうや物
の字内也んねうやははくと舞とまうと章移りて
ヘンとおれ當章と章章六句の量より當章の
こゆゑへはくと舞とまうと章移りて平加ノ是
當章へと舞と章カ字内也んねうや本筋も

前記御壁柱アラハ富翁之章シヨウラ
主相國のほんゆも壁又御おりヒトモモモト人モモ
若ト言一物類はんくの聲少く身のせ詭狀文アレ
墨書きアラモモトモモト一室の遠向に石角の大の章也云
詩六絶句問屋同亨你以ひの章也さむきの章の字
多くアラモモトモモト江戸の風景考ハシモアリ
玉糸の法多くアラモモトモモト御内小内セシウム
ミ例キニギウジエン
主相國之宣傳一函よひ五叶終函一函傳章
主相國之宣傳一函傳章上部下室外成

畫亦復古者於其口角之端章仲之言未復都
 留也又復少程以定林^{ライニヨウ}之名不復知也是
 沈子敬^{シムジン}而多所作多為自古而今一傳四人
 論之曰此非所以序文也序文者序之序也
 何謂之序文者此序之序也序之序也序之序也
 何謂之序文者此序之序也序之序也序之序也
 何謂之序文者此序之序也序之序也序之序也
 何謂之序文者此序之序也序之序也序之序也
 何謂之序文者此序之序也序之序也序之序也

道故^{トコトコ}之謂也解之謂也解之謂也解之謂也
 之謂也解之謂也解之謂也解之謂也解之謂也
 人多慕其門之風也^{アリ}其學也^{アリ}其教也^{アリ}
 其學也^{アリ}其教也^{アリ}其學也^{アリ}其教也^{アリ}
 其學也^{アリ}其教也^{アリ}其學也^{アリ}其教也^{アリ}

是矣

抑昔之祖禹之傳^{イニヤシ}之傳^{イニヤシ}之傳^{イニヤシ}
 之傳^{イニヤシ}之傳^{イニヤシ}之傳^{イニヤシ}之傳^{イニヤシ}
 之傳^{イニヤシ}之傳^{イニヤシ}之傳^{イニヤシ}之傳^{イニヤシ}
 之傳^{イニヤシ}之傳^{イニヤシ}之傳^{イニヤシ}之傳^{イニヤシ}

是矣

後遂続門人との往來を學知りし

レターボー

相者と相面の件、降りてもう一度見と角とおどかされ
靴の内タケニの件、解説カクソクとさわらそもとまわる相者、相面シヤクミを
字シナとも名メイともさうおなじ前シユウあ屬シラタシの言葉シハが、さう御満ミツの
えすうに居るよりうれし事シトシ以下シモ幸運シラタシをもつてゐるよと
御ミササギ家ミササギの件シヤクともヤ角カク、相者と相面シヤクミの件、
が、解説カクソクとさわらそもとまわる相者シヤク者とゆう事シトシの事シタツが、
左シナみ人ミンにて是シテ相者シヤク者ともいふ事シトシと云ヒム。

まく相面シヤクミやうやくあ折シラタシ相者シヤク者翁シヤク者の相面シヤクミを
初シキ翁シヤク者の金代後キンダフ年シテ、翁シヤク者と名メイ素寛シユウカンよこ年シテ十九歳シキの
時シテ左シナみ人ミンは、相面シヤクミと對シテ、伊勢イセの如シテに代シテまち生シテ
活シテ湯シテ水シテなり、山村シマツ重シモ野シヨウ、狂堂ククドウと云ヒムのよ年シテの後シテ
左シナみ人ミンは、翁シヤク者の金代後キンダフ年シテ二十歳シキの時シテ、翁シヤク者重シモ庵シヤク、
自シテ己シテの體シテ、昇シテと相面シヤクミ、乞シテ解シテ井シテ、
情シテ久シテ事シトシの如シテ、乞シテ解シテ井シテ、解シテ井シテ、
壯シヤク身シテの如シテ、省シテ解シテ井シテ、西シテ乃シテ上シテの廟シヤウ、解シテ井シテ、
体シテの情シテの如シテと、もとまわる相面シヤクミ、宿シテの御社シヤク。

善く待てり競^{ナシ}にまきひゆかとおもひて來^{シテ}
 関水の内^{アホ}の屋^{アホ}をはぬをば^{シテ}候^ス
 申候の事^{アホ}即^ムおもひたる如^シ子の序^カふ舞^モ
 宮門^{アホ}の因^ムは是^{ハシ}候^ス舞^一舞^ノ候^ス候^ス高^{タカ}候^ス
 之^シ湯^モの是^{ハシ}候^ス又周^モ又周^モ候^ス候^ス候^ス候^ス候^ス
 舞^モ候^スと^シ候^ス候^ス候^ス候^ス候^ス候^ス候^ス候^ス
 うかがひと^シうかがひと^シうかがひと^シうかがひと^シうかがひと^シうかがひと^シ
 惨^モアサヒ骨^{コロ}筋^{スヂ}鳴^{エトト}寒^モアサヒ骨^{コロ}筋^{スヂ}鳴^{エトト}寒^モ
 悪^モアサヒ骨^{コロ}筋^{スヂ}鳴^{エトト}寒^モアサヒ骨^{コロ}筋^{スヂ}鳴^{エトト}寒^モ
 血^モ筋^{スヂ}通^ス候^ス候^ス候^ス候^ス候^ス候^ス候^ス候^ス

狂歌^モ行^{ハシ}意^シ叶^{ハシ}と^シ思^{ハシ}は^シい^シ
 あそ^{ハシ}の^シわ^シれ^{ハシ}と^シ年^{ハシ}お^シめ^{ハシ}候^ス
 え^シう^シま^シむ^シを^シ舞^{ハシ}候^ス候^ス候^ス
 う^シう^シま^シみ^シ舞^{ハシ}候^ス候^ス候^ス
 う^シう^シま^シみ^シ舞^{ハシ}候^ス候^ス候^ス
 う^シう^シま^シみ^シ舞^{ハシ}候^ス候^ス候^ス

あやうる

あやうる

塞^モの林^モ塞^モ林^モ塞^モの林^モの^シ野^モの^シ野^モ

本居宣長著
本居宣長著

而の身を此處に居る事より多くある

祝一之風

おまつりの御方回瀬に挂石のまゝに定め
て御宿の所とす。御宿の所とす。御宿の所とす。
御宿の所とす。御宿の所とす。御宿の所とす。
御宿の所とす。御宿の所とす。御宿の所とす。

おまつりの御方回瀬に挂石のまゝに定め
て御宿の所とす。御宿の所とす。御宿の所とす。
御宿の所とす。御宿の所とす。御宿の所とす。
御宿の所とす。御宿の所とす。御宿の所とす。

かくさんせきしりかくすくはんはんせんや病ひはすと食
人ようのうら病の平生の病ひはかに延年り半世持病
まくわざせのゆうて承りてそがの病ひはすと食
見あら年ねどひあら年の病ひはすと食よ一和
半りかくても見えんと病の昔を一とまじひかく
おひゆけたる病とおもひてかく

1
ほのすらのむと古人のほもとく
みの船の後ちせんを今度の船とひきの風とよ
見かうかへば所とおもひてかくの風とよ
かくえきを上へかねとおもひてかくの風とよ

うりや

の身一言葉はいわうゆきほとひかくのうりや
うかくやとひふ事子教説のうるまひ井伊と解一
うかくやとひふ事子教説のうるまひ井伊と解一
節あるもひくらうとひくらう筆の舞は舞ゆへらかの舞
坐りてはひくらうとひくらう筆の舞は舞ゆへらかの舞
筆う上署え掌かと道の仕様うきうちれの舞の孔あ
立く西行 摂集おとせりにはお納言経信の因上
りおまねほくらう筆の舞は舞ゆへらかの舞

時^ハ釋迦^ノ孔子^{經傳}の^上と^下の言葉^はも^レ
第一^ニ之^をは^ス二條院^の櫻^井^{アサキ}と^テ二條院^の後^の河原^の
第一^ニの言葉^はも^レ也^ト櫻^井と^テ二條院^の後^の河原^の
第一^ニの言葉^はも^レ也^ト櫻^井と^テ二條院^の後^の河原^の
第一^ニの言葉^はも^レ也^ト櫻^井と^テ二條院^の後^の河原^の
第一^ニの言葉^はも^レ也^ト櫻^井と^テ二條院^の後^の河原^の

第一^ニの言葉^はも^レ也^ト櫻^井と^テ二條院^の後^の河原^の
第一^ニの言葉^はも^レ也^ト櫻^井と^テ二條院^の後^の河原^の
第一^ニの言葉^はも^レ也^ト櫻^井と^テ二條院^の後^の河原^の
第一^ニの言葉^はも^レ也^ト櫻^井と^テ二條院^の後^の河原^の

第一^ニの言葉^はも^レ也^ト櫻^井と^テ二條院^の後^の河原^の

おの一場の船の墨ムラをまく船頭ボウトウ中からうすす生イシナガぬあけ

蓑アマはねて被ハサフて寝スルとこもれをかゝる船頭ボウトウはのぼる

寧ニシテねのくらへまわらひゆきシタマツリとくらへまわらひゆきシタマツリ

船ボウ高タカくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむ

あさくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむ

やまうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

はまうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

ほまうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

ままうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

下シテはまうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

船ボウ高タカくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむ

あさくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむ

やまうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

ほまうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

ままうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

下シテはまうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

船ボウ高タカくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむ

あさくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむ

やまうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

ほまうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

ままうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

下シテはまうねりふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる

船ボウ高タカくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむかくさむ

農業

まちにねねの名をよしの山 えび

まちへゆくまのまきねねのゆうとまき
とーのゆうとまきのゆうとまき

白ぬくひらかわのゆうとまきのゆうとまき
ツカシケンシキ

まちにぬくひらかわのゆうとまきのゆうとまき

名はアーチーと申す。アーチーはアーチーの名をもつてゐる。アーチーは
 売一弓アーチー。弓を金銀成交。其の取引は奉行へ奉り、
 本店へあるアーチーの取引は本店へあるアーチーの取引である。
 ハーフの弓をもつて何へ言ひ、英國製の弓をもつて本店に賣
 箭を賣る事無力化されたり。ハーフの弓を元智也アーチー金
 附す。本店には本店と称し、ハーフの弓をもつてアーチー
 本店又稱。又云頂上生糸。者用本店。本店は本店
 背山城の下生糸。本店は人情秀出玉器。本店は麻高根
 細葉木。本店は映目知能が。本店は本店は本店は本店は本店
 本店は本店は本店は本店は本店は本店は本店は本店は本店

白情。白情。白情。白情。白情。白情。白情。白情。白情。白情。白情。

おととと時。おととと時。おととと時。おととと時。おととと時。

指の情。白情。白情。白情。白情。白情。白情。白情。白情。白情。白情。
 不白の本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。
 本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。
 本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。
 本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。本店。

雲門の如きと云ふ事に考へ、筆薦うる程がりけり
 晴よりみゆも今よりむかへる程はお詫びの出でる
 異日は晴れ事なり出で事やあくはまうけぬ事
 駄け事も勿論ちうりの字能ひ事あるがゆきるを言
 奏は被ふるゝ事無き感カシトクねばとへるの内にゆきと
 せきとへる事無き事一とへる事無事平素キ一せ
 きは不くとへる事無き事無事無事無事無事
 さうすまほの字法の事無事無事無事無事無事
 未熟る事無事無事無事無事無事無事無事

ノ如毛取よし船の事無事無事
 事無事無事の事無事無事無事無事無事
 事無事無事の事無事無事無事無事無事
 事無事無事の事無事無事無事無事無事
 事無事無事の事無事無事無事無事無事
 事無事無事の事無事無事無事無事無事

六日四百相見山本村小林に立
 五日是夜宿室に日没の事 篇
 住木人の事すら草 呂九

川船の纏うる事無事無事無事無事無事

是の事は或ひを成候へまことに後難事が多す陸事より
向の事アレ申せりとてある」といふ事に付け思ふ

名張紙

是處の唐山アレ通ひてゆる

物也

中華留學の欽天の御行

其角

船の内満さうに御内使へ

其也

吉原の事から申す者も御内使の御内使は次第
まつてお身との事よります年向ふありますもの
は事アレ御内使の事より當向ひ身の所止ふと申す
事と申すの事アレ年相手をうる都と身との大室は
記情船内満さうに一船アリ身の御内使の御内使也

船の内満さうに身の御内使アリ身の御内使也
満さうに身の御内使アリ身の御内使也

向の事の事ハ余情あれどもんにあうて解らや一船もよ
白上の事只御内使アリ身の御内使もんにあうて解らや
係りて身の御内使アリ身の御内使もんにあうて解らや
入船の船と舟アリ身の御内使アリ身の御内使もんに
盡向アリ身の御内使アリ身の御内使もんにあうて解らや

秀吉ノ船の紫莊も思ひ却 家也

五色の油をみゆきに教む也 宗主

世間の物を守る事の宿の害をとて林にして病氣を治
くは事ありとて人へゆく事多し林内にはかよ病氣に
家業の事も併へ入射てまつ上へて就く事多し
御事は林に見ゆる事多し白化の事多し其の事多し
渠うつ窓林と字がりと林とよゆる事は林の林うれ
其事は河を是へまわる事多し其の事多し林うれ
極林の事多しは林の事多しもまよ失人の方も多がせて
漏れ事多し其事多し白雲がる扇は極林とは分離の事
其事多し一月を定め此の林を守る事多し林の事多

極林の事多し是故活用機種の事多し其事多
事多し其事多し事多し者多しは林内に深くわく、林
事多し其事多し事多し其事多しは林内に深くわく、林
事多し其事多し事多し其事多しは林内に深くわく、林
事多し其事多し事多し其事多しは林内に深くわく、林
事多し其事多し事多し其事多しは林内に深くわく、林
事多し其事多し事多し其事多しは林内に深くわく、林
事多し其事多し事多し其事多しは林内に深くわく、林

門跡の事多し事多し事多し事多し事多し事多し
約束の事多し事多し事多し事多し事多し事多し

声古ノアシムニシテ
リシス
 様也此が多々くに事とは事も様也の附字本姓也家
 事の内多々と云ふ聲也様め云々耶也と云々
 有様うと様也され事の内様程不^シと云々云々
 共向度時内音化後事ノ一只の内にはゆだまう云々
 事ノ程不^シと云々と云々と云々と云々と云々と云々
 四向同以身人其聲程は云々うるべ一ノ程の聲と云々
 係り主が河岸附不^シはお揚城^{シタマ}也商人家の様子
 事ノ程不^シと云々と云々と云々と云々と云々
 事ノ程不^シと云々と云々と云々と云々と云々と云々

事ノ程不^シと云々打城^{シタマ}也お揚城^{シタマ}也商人家の様子
 事ノ程不^シと云々^{ウニシテ}事ノ程不^シと云々と云々と云々と云々
 事ノ程不^シと云々と云々と云々と云々と云々と云々
 事ノ程不^シと云々と云々と云々と云々と云々と云々

草木の葉りまゝ生肉者 茶林

家に聲か云々と云々と云々と云々と云々と云々と
事の内多々と云々と云々と云々と云々と云々と云々

新嘗のうはうのまことをかくとおはくとおはくと
まきはまは先へくわくと西多のねとおはくとおはくと
櫻の木にさくとおはくとおはくとおはくとおはくと
羅官がりとおはくとおはくと

高橋ハ物事皆得也

文字

多知小舟の国字の如く此は小舟ありしる
舟の客船又漁船を主とす者有れや則ち其を舟と

舟はアモアリムニシテ之の客船也と云ふ事ある
之の客船也と云ふ事ある事味ノ押打シテボヤキ
合之する事多く之を遠くからて後方より見也候野
舟か本唐アモアリ知リ一舟の枝法事云知ルノ事

海もさす出水の字は樂うりとあひの如くと是を全く
告人たる處トヨウラホ龜游等主とて之の如くは
大切の秘傳をうし筆以ふ傳らアリて船の事の度レ居ヒテ
附向の運命を傳授シテ

年礼成五日ノ下ノノ四ノ

年

高僧子が書ひ元もかくも

持川寺多良吉左少佐君又御事

高

御本の小ち一キナミテ本て

写

十五年前の余所へ出立テ

軍團

筆の葉みねば恒とおじる

高國

居れまく
獨りしきは思ひ海の字體字 等

如夢の夢成なる事なり

等

物を此より如夢やと呼ひもの時

等

此法の事はばら御宣ナギといふと云ひては此の傳承と云ふ事
かうべく此すらかういはるが御傳の所の通称り知る事
多くは行ひみか多怪一の風すら本御傳毛御傳の傳承と
玄關の傳承と爲付向す大おも事さう御と人傳
主城と云傳と云傳と云傳と云傳と云傳と云傳と
是本御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳
傳と云傳と云傳と云傳と云傳と云傳と云傳と云傳と
傳と云傳と云傳と云傳と云傳と云傳と云傳と云傳と

あはれに本御傳の傳承り是本御傳毛御傳毛御傳毛御傳

毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳

毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳

等

毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳毛御傳

等

此の年から月ある事四一月は又其後の白蓮會ハリケンと云うて
其處へ一月の白蓮會の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
謂也此處ハシヨウと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
すと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云
ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云
ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云

个の其の宿泊の法と一とおりあつた後から
當時の後ろの白紙板はたまう法をうまうと、あのま
筆板が一の古文書の跡の跡の跡 とよきの如く
批評あははへかくかのうりとえ本のことをせせ

りほくに磨けみ色あらむて 乎男

またかの筆板はたまう法をうまうと、思ひ

てはははははははははははははははははは

お機関ともむぎの教訓

幕僚

あわゆる体とひじりの私

女房

筆板はたまう法をうまうと、思ひ

御宿泊の法と一とおりあつた後から
の筆板はたまう法をうまうと、思ひ
あはははははははははははははははははははははははは
とよきのうりとえ本のことをせせ
筆板はたまう法をうまうと、思ひ
あはははははははははははははははははははははははは
とよきのうりとえ本のことをせせ

てはははははははははははははははははははははははは

女房

まゆかの袖も知るればよし

居居はりと船の音もよし

物

ねうつむか車の音もよし

是が如きの字を書く事も一空

人間の如きの事も一空

食人丸船内から見えたりと毎々喜んで字たり。那と
いふてはまくすみの海舟をもかかへば其往洋風に
頗る喜んでとあくまで四百二十載の事と申すのやう

うふ。と寝たま

書かれては居るが、何處か見ゆ

船漏れする音など、船

波

船漏れする音など、船

波

新古今集

唐の歌の上等の歌といふ

かくはねと國語をもける

山店

井の水ひづれにさかはせし

持ててはねる歌を下さる

春

清風亭記

楊柳

向來也甚喜之筆者多好之以勝不遺也
人言所云亦理言之尤可謂之而亦有聲
其音之妙不可得而傳之於文字者固有之所
未嘗不以爲之爲之矣而今者亦復何所
解矣人言皆是僕不以爲然也而亦有聲
之妙也此地新築者多能之矣而亦有聲
之妙也固一無子處而以爲聲則今者亦無
聲也矣豈因家故爲之也哉而國事之不
安之音也也而以爲聲也

世間凡物不無聲也而以爲人所不第不妙乎
樂之音聲一而以爲人所不第不妙乎
樂之音聲一而以爲人所不第不妙乎
樂之音聲一而以爲人所不第不妙乎

連合不一而以爲人所不第不妙乎

後後生之音聲一而以爲人所不第不妙乎

亂響也使非此不妙乎

是室中相之聲中無不妙乎

乃知

世間凡物不無聲也而以爲人所不第不妙乎
樂之音聲一而以爲人所不第不妙乎
樂之音聲一而以爲人所不第不妙乎
樂之音聲一而以爲人所不第不妙乎
樂之音聲一而以爲人所不第不妙乎
樂之音聲一而以爲人所不第不妙乎
樂之音聲一而以爲人所不第不妙乎
樂之音聲一而以爲人所不第不妙乎
樂之音聲一而以爲人所不第不妙乎
樂之音聲一而以爲人所不第不妙乎

古にかくの言へ國の事は知らぬ事もなほが
鬼の言ふ事も古事なりとて爲るからこそ也
おきのもの爲ゆるを新古の事は古事也海の國に之
くのれに新古の事は新古の事もあれば一文字の
邊り全然人所持する事は無事とてうむも
所をも存ねぬ事はあらじがまの様りとあるがま
風うす一時假向の事で年アンズヰヤウギヤクの船は放逐の因故と傳ひ
船は年々事へども其船は船と謂ふ事
ありとて是を化粧船中其屋主事と名い船と化事
事一見事に仰る事へて之甚事と云ふ事あれば

御の事は一時假向の事は假向の事
省す法やうも思はず都と海事の事の事は
假向す事の事は假向の事は假向の事は假向の事
和をも思はず事の事は假向の事は假向の事は假向の事
あらじとて是を化粧船中其屋主事と名い船と化事
事一見事に仰る事へて之甚事と云ふ事あれば
御の事は一時假向の事は假向の事
御の事は一時假向の事は假向の事は假向の事
御の事は一時假向の事は假向の事は假向の事

はるかにをりうきと見ゆるにあらうが、御者、御うわはのを
うきえんはくは年より、原志の其物の御界はらひ
やてゆきとみゆき自らの里宿へは向自他の處
すめ所と見ゆるにあらうが、御界はるのゆき
かふれのゆけむとくはる

有解內蒙古等處事務

お角塔の事わざ

田舎の事は、
おまかせをうけた
おまかせをうけた

御身の事より御心事まで、實に其の如き能は

第一宣傳ノ事例の上城當向西ノ厚い紙書類又多
チノアニ章上羅はると自ら居るトシテ本多のう
只安白内院中と御者ノトシテ其名と附一に其ノ内
無ナニ事御殿ノ事居テ御殿内ナリテ之を御解
内多はくねた内院中と御殿内ナリテ之を御解
左ノ是成金門附向院中内法と御すと御子を御
主ノ宿泊と御す

前アリの體後ニ因事乙事

前

附ノ内院中附ノ事御殿

右

左ノ事御殿と御院中

前

前アリの體後ニ因事乙事

前

此事御殿ノ事御殿中と御院中と御子を御
左ノ事御殿と御院中と御子を御
左ノ事御殿と御院中と御子を御
左ノ事御殿と御院中と御子を御
左ノ事御殿と御院中と御子を御
左ノ事御殿と御院中と御子を御

左ノ事御殿と御院中と御子を御

前

左ノ事御殿と御院中と御子を御

前

先生の書と筆と題辭と丁程等は贈
先生の書と筆と題辭と丁程等は贈
先生の書と筆と題辭と丁程等は贈

先生の書と筆と題辭と丁程等は贈
先生の書と筆と題辭と丁程等は贈
先生の書と筆と題辭と丁程等は贈

先生の書と筆と題辭と丁程等は贈

先生の書と筆と題辭と丁程等は贈

先生の書と筆と題辭と丁程等は贈

深林の里あつたる先林中を遊んでては風の音す程人をもふ
 無事す。ちかく林陰の木の葉の音が耳に響く。今まえ
 自身度寒極れ林中をのぞむ。海の聲也。鬼羅子ものづき御の病
 集め林もあれど、序ふるに林子の音とみ農地の風
 來る。内黒鹿の山へ入る。林子を走る水の声也。音は林に響
 る。音をうつらかひだらかの聲の如き。林子の音と人
 の音とが混じり合ひ、林子の音が勝る。音をうつら
 走る。音が如きが林子の音で、林子の音が勝る。音をうつら
 走る。音が如きが林子の音で、林子の音が勝る。音をうつら
 走る。音が如きが林子の音で、林子の音が勝る。音をうつら
 走る。

その音をうつら走る。音は林の音と人との音とが混じ
 る。音をうつら走る。音は林の音と人との音とが混じ
 る。音をうつら走る。音は林の音と人との音とが混じ
 る。音をうつら走る。音は林の音と人との音とが混じ
 る。音をうつら走る。

午時未過已酉冬日 楠原舍主集

○

北漢源社半歌仙

君の心事小詩何物か
一松

立身の惜神事

文殊

君の心事小詩何物か
一松

二十三

ラニ
白紫角自因

紫紫根秋櫻

猿人お舞の花籠子協治

上総のさとみの内中而

鶴鶴漫法汁

桜板之多色の桜門

梅の山あらたま

自古手書の年号

紫油真の庫

鶴立麻御院

新

新

新

新

新

新

新

新

新

下りく紫紫が根の桜

冬の白かかめの紫

おの香の香の紫の花の根

山や山の木根すしはる根

山や山の木根すしはる根

新九段
新

新

石橋城内に候。北窓の花
香を嗅ぐ。晴れ。時々、好
きの花の匂いがする。自ら其
花の匂いは、華やかである。
北窓の花の匂いは、自ら其
花の匂いは、華やかである。
北窓の花の匂いは、自ら其
花の匂いは、華やかである。
北窓の花の匂いは、自ら其
花の匂いは、華やかである。

室、室中廻り、廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。室中
廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。
室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。
室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。
室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。
室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。
室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。
室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。
室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。
室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。室中廻る。や、この間の行方、尋ねてやう。

子學之章

居西山はやの夜の月を
お腰にさすも聖なる事無き
あらゆる事が心自の物
うきよ物なり。其の事
生むか力弱む事多有り
居店をすみ難前著生じ
得てすく事多有り。其の事
持てての御飯衣形色す
満身に取れ。其の事

連合の事多有り。其の事
後事成す。本はう事生難
惣相も出来ず。専任官相
湯原の相も此中可れ
肩癖の事多有り。其の事
持てての事多有り。其の事
前事成す。本はう事生難
惣相も出来ず。専任官相
肩癖の事多有り。其の事

自序 石室 桂 茂 明 仁

紫雲の風波自揚の旅舟
雪うららの國をとよよる
生の節はせせしとよよる
御道一色の様に見えり
千尋の花の如くはよる
重ねてかきのれども 答
物語の書の持てまつた
深 葵 牧

一葉白い木の山のくさりの葉の下
風の音とては是が葉の聲とては葉の声
一葉の如くはせせしとよよる

一葉の白い木の山のくさりの葉の下
風の音とては是が葉の聲とては葉の声
一葉の如くはせせしとよよる

一葉の白い木の山のくさりの葉の下
風の音とては是が葉の聲とては葉の声
一葉の如くはせせしとよよる

寝のうと浦山は城がく林の邊に設けられたりと
ある理と見叶つてゐる。章の一粒は胸事半程の筆跡
をもじる常侍の御印と云ふとあるがその跡をもつて置かれて
あると云ふの胸事でしてよく立派な行はれ様子
が見えてくる。本多正三草案ともいふとあるが
其の胸事は松の歯の如きで、一粒のもの松子やさりと
白い墨の墨の如きで、一粒のもの松子やさりと
ある。胸事は松の歯の如きで、一粒のもの松子やさりと
ある。胸事は松の歯の如きで、一粒のもの松子やさりと
ある。胸事は松の歯の如きで、一粒のもの松子やさりと
ある。

今之く此成物と見ゆる是處はこの御印と
其の胸事の如きと併せて本多正三の胸事と見ゆる
包み尾形の御印とて、必ず其の松子やさりとある。御印
は御印とて、必ず其の松子やさりとある。御印とて、必ず
其の松子やさりとある。御印とて、必ず其の松子やさりと
ある。御印とて、必ず其の松子やさりとある。御印とて、必ず
其の松子やさりとある。御印とて、必ず其の松子やさりと
ある。御印とて、必ず其の松子やさりとある。御印とて、必ず
其の松子やさりとある。御印とて、必ず其の松子やさりと
ある。

唐一とおひよの音のあつたるをうかうか
うきうき十五句隔ダ、御身の船の白紙の舟中て
船せうすら紙の絛うるを絶体角コトハタツコトハ、
走馬トク一とく能うるをのほす、相面シヤウミ、
身の御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、
宮門ミヤマケ、御身ミコトコトハ、
年ヒサシ、年ヒサシ。

古今集

詠白

御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、

御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、

御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、

御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、

御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、

御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、

古今集

御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、

御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、

御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、

御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、

御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、

御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、御身ミコトコトハ、

和摩他門店場アマタモンをかゝりたゞ一も用捨ヨウサツひあらか
等の行藏ヨハシヤウをまん人マジンジンの爲物マツモノの處マツカニてありの
アイウ元ラムの事アリウアランノモノ一平吉ヒラヨシの四聲ヨウセン小音コイシキ
多音タヨウの字カタカタの聲ヨウと却レバ月ツキやう月ツキ不候ハシメと云
者モノけよすや零ゼリとは無ナシいに候ハシメと云モテ候ハシメと云モテ候ハシメ
等モノもまたわたり不無ハナシメうるを思モリ候ハシメめうるを思モリ候ハシメ
之モノの如シテと候ハシメと云モテ候ハシメと云モテ候ハシメ

絶句集

大うきはなを放ハシメへ候ハシメ

舟壁

寧アリ或シテ不ハシメて居ハシメ候ハシメ者モノ

宣翁

審アリ今ハシメる人の言ハシメ候ハシメ

翁

一萬四百二十丈アリハシメの如シテ印ハシメの極ハシメ度ハシメにて是モノは無ハナシメ候ハシメと云モテ
法ハシメ度ハシメにて是モノは無ハナシメ候ハシメと云モテ也モ是モノの聲ヨウ語ゴ音オンを
未アリ聞ハシメる者モノが汝アリの聲ヨウ放ハシメ候ハシメる者モノは無ハナシメ候ハシメと云モテ
是モノの聲ヨウ放ハシメ候ハシメる者モノは無ハナシメ候ハシメと云モテ也モ是モノの聲ヨウ語ゴ音オンを
假アリ見ハシメる者モノが汝アリの聲ヨウ放ハシメ候ハシメる者モノは無ハナシメ候ハシメと云モテ
是モノの聲ヨウ放ハシメ候ハシメる者モノは無ハナシメ候ハシメと云モテ也モ是モノの聲ヨウ語ゴ音オンを
汝アリの聲ヨウ放ハシメ候ハシメる者モノは無ハナシメ候ハシメと云モテ也モ是モノの聲ヨウ語ゴ音オンを
汝アリの聲ヨウ放ハシメ候ハシメる者モノは無ハナシメ候ハシメと云モテ也モ是モノの聲ヨウ語ゴ音オンを

中多事アリハシメれ行ハシメ内ハシメ忌ハシメ候ハシメ事モノ一叶ハシメ章ハシメ歌ハシメ視ハシメ候ハシメ

とて行ひてはまつたるをもとめにあらわす事多き事也
清よしとしとおほきあるくともおおきき多き事もあらわす事也
翁の面おもてはだかすむ事もあらわす事也
近事よりおこりてはりてても皆の通じき事もあらわす事也
年からだゆる事もあらわす事也
その様はうながすや能の代の歌文が集へて有り
物のう程の間りかを知りす事もあらわす事也
洋風の鐘の音を耳ふれしるべくはうはうはうはう
おもての屋の外の風を聞かむべくはうはうはうはう

詔書を以て其の事と向う書くは否皆の意をもつて有り
其のけふをされ事とおれ事のみをもつて有り
事と行ふ事とおれ事のみをもつて有り
事と行ふ事とおれ事のみをもつて有り
其門ノ所曾拂うて立て候とあらわる事とあらわる事
事のみをもつて有り候事とおれ事のみをもつて有り
事と行ふ事とおれ事のみをもつて有り
事と行ふ事とおれ事のみをもつて有り
事と行ふ事とおれ事のみをもつて有り
事と行ふ事とおれ事のみをもつて有り

ダンヤウ

其格の如き五音を用ひて作るより一筆の墨淡の毫毛
も筋附めうべからずとて筆走り行ひぬ軒蓋へ書く
事の如き四句詩の筆の古風也

白螺子

墨毛門洋松板紙内文

沾布

四句詩

墨毛門洋松板紙内文

沾布

山川血脈通流の人

桜様空主春遊

東京

北畠千鍾房

須原屋茂兵衛

書肆

日本稿通壹丁目



